いっしょに考える
「福島、その先の環境へ。」

チャレンジアワード

CHALLENGE AWARD

受賞作品

2021

〈目　次〉

審査委員会　講評 …… P1

最優秀賞（環境大臣賞）

里山モデル福島への道 …… P5
福島県立ふたば未来学園中学校・2年 林 佳瑞

蝶の研究から学んだ「自然と共生する福島」の実現方法 …… P7
福島県立福島高等学校（普通科）・1年 守谷 和貴

芸術で狼煙をあげよう …… P9
立正大学心理学部臨床心理学科・4年 横山 葵

優秀賞（福島県知事賞）

ワーケーションで福島に元気を！ …… P11
猪苗代中学校・1年 吉田 昊生

「think locally act globally」～東京都から只見町で暮らしてきづいたこと …… P13
福島県立只見高等学校・2年 三宅 実美

study×vacation …… P15
慶應義塾大学環境情報学部・1年 中川 佳子

優秀賞（教育長賞）

「福島、その先の環境へ。」 …… P17
福島県立ふたば未来学園中学・2年 阿部 一葉

私たちが変えていく、福島の未来 …… P19
郡山高校・2年 秋山 風凜

故郷になる町 …… P21
慶應義塾大学 環境情報学部・1年 鈴木 愛奈

入　賞

「福島」から「世界」へ …… P23
福島県田村市立船引中学校・2年 秋元 椋太

きれいな福島へ …… P25
福島県立ふたば未来学園中学校・2年 齋藤 佑磨

豊かに暮せる福島を目指して …… P27
川越市立東中学校・3年 中野 晶藍

未来を生きる私たちと未来に向けてのSDGs …… P29
只見中学校・1年 新國 夢萌

「時間の流れが教えてくれたこと」 …… P31
福島県立ふたば未来学園中学校・2年 渡部 咲希

「未来への一歩」 …… P33
葛尾村立葛尾中学校・2年 渡辺 さくら

ワーケーションの聖地としての福島・いわき市 …… P35
福島県立磐城高校・1年 草野 ひな美

放射線と福島 …… P37
福島県立会津学鳳高等学校（総合学科）・1年 齋藤 水月花

守り続ける福島、変わり続けるふくしま …… P39
福島県立福島東高等学校 普通科・2年 宍戸 結実

復興への羅針盤 …… P41
福島県立福島高等学校・2年 錫谷 智

スポーツで元気になる福島 …… P43
昭和鉄道高校・3年 野沢 凜成

福島県の「多様性」のもつ可能性 …… P45
福島県立磐城高等学校・2年 渡邊 七香

特別賞 …… P47

いっしょに考える「福島、その先の環境へ。」チャレンジ・アワード 審査委員会 講評

〈各委員の所感～チャレンジ・アワードの審査を通じて感じたこと～〉

いっしょに考える「福島、その先の環境へ。」チャレンジ・アワード 審査委員会 委員一覧

委員長　渡邊 明　国立大学法人 福島大学名誉教授、地球にやさしい"ふくしま"県民会議代表

委　員　CANDLE JUNE　一般社団法人 LOVE FOR NIPPON代表
久保田 彩乃　一般社団法人 ヴォイス・オブ・フクシマ理事
大山 一浩　福島県 生活環境部 次長
高野 英樹　福島県 教育庁高校教育課 指導主事
則久 雅司　環境省 環境再生・資源循環局 特定廃棄物対策担当参事官
三木 清香　環境省 大臣官房総合政策課 環境教育推進室 室長
（代理：田代 久美　環境省 大臣官房総合政策課 環境教育推進室 室長補佐）

〈作品の評価方法と全体の公表〉

「福島、その先へ。」チャレンジ・アワードは、昨年11月27日から1月29日までの期限の間に、福島県県内外から中学生部門197作品、高校生部門141作品、大学生等部門23作品の応募がありました。事務局による一次審査を経て、中学生部門30作品、高校生部門18作品、大学生等部門10作品を一次審査通過作品とし、これらの作品を対象として、審査委員会による二次審査を2月10日に実施いたしました。

各審査委員における採点と協議の上で、各賞が決定されております。どの部門も、力作揃いでしたが、応募数が少なかった大学生等部門は、上位3賞のみの授与とし、応募数の多かった中学生部門、高校部門の入賞本数を増やしました。

審査にあたっては、身近な環境や自らの実経験から考えたアイデアや発想など、自分なりの考え・主張が入っている作品。そのアイデアや発想に対して、実現性・具体性があり、自分たちで取り組めるような（自分事として考えられるような）解決策を提案している作品。加えて、福島県の特長や良さがしっかりと書けている作品、説得力のある文章である作品が高く評価される傾向にありました。

中学生部門、高校生部門の最優秀賞(環境大臣賞)は、ともに、県内在住の生徒による自然をテーマにした作品が選ばれましたが、いずれも実際のフィールドでの体験を通じて人と自然との関わりについて自らの考えを添えて問題提起したものであり、広い視野で「その先の環境」を捉えていることが高い評価を得たものと考えています。

また、今回、一次審査通過作品のうち、残念ながら、入賞に至らなかった中学生部門、高校生部門の作品のうち、再生可能エネルギー等をテーマに取り上げた作品については、特別賞を授与することといたしました。多くの若者が、再生可能エネルギー先駆けの地としての福島の可能性について言及していただき、心強く思いました。

――渡邊委員長

震災が発生した当時、中学生は幼稚園生で、高校生は小学生くらいかと思います。皆さんの作品を読んで、小さいころの経験ではありますが、震災や原子力発電事故が、これほど強い衝撃を与えていたこと、また、県内に居住していた方は、その後も様々な困難に会い、自らの復興に取り組んでこられた事を知りました。原子力発電所を利用してきた責任世代として、その責任を強く問われた感がいたしました。その一方で、こうした経験や困難を自らの力で克服しようとする柔軟で、生き生きとした未来志向が述べられていることに強く感動し、明るい未来を感じました。

特に、現在課題になっているSDGｓや地球環境というglobalな課題を身近な課題として感じつつ克服したいという思いや過疎化や人口減少など地元復興の課題に取り組む真摯な姿勢が読み取れる作品が多く、感動を覚えました。多くの皆さんが作品で取り上げた再生可能エネルギーは、私も過去5年間ほど多段階垂直軸風車の開発に係わりましたが、回転軸の軸ブレ制御という機械工学の基本的な課題が克服できず、多くの時間と予算を使いながら失敗した経験を持っています。太陽光発電でもシリコン単結晶系の最大変換率は24%程度で、現在量子ドット太陽電池の開発が進んでおり、その効率は60%を超えると言われていますが、使える製品にはなっていません。こうした研究開発には皆さんが作品で示された未来に対する熱い思いと継続的な研究が不可欠です。この作品で示された思いの実現者として活躍することこそ、福島の復興だと思います。決して容易な道のりではありませんが、だからこそ成し遂げる価値があるのだと思いますので、次は実現者としての皆さんの活躍を期待したいと思います。

震災・原発事故から10年、2011年以降地震災害が4件、火山災害が3件、豪雨災害が12件と多くの災害に見舞われています。そんな中「いつまでも福島県か」と言われることもあります。また、県内でも双葉八町村とそれ以外の居住者との間で復興に対する意識もだんだん異なってきているのを感じます。応募された作品との出会いは、審査委員を離れて、福島県民の一人として強い支援をいただくことができました。また、この企画で日頃福島支援でご苦労されている皆さんと遠隔ですがお会いできたことも心強く思いましたす。是非、今後も継続していただくことをお願いいたします。

――久保田委員

私は、数年前から原発事故被災地域の仮設の小学校、中学校とか、帰還が始まっている小、中学校などで、子どもたちと地域をテーマにしたラジオ番組制作や映像制作など、地域取材ということを総合学習の中で支援として活動させていただいてきました。大人たちは被災地の子どもたちという意味を持って子どもたちを見て、その子どもたちには明るい未来を見てほしいとか、地域課題を解決する何かすべを持ってほしいという意味を込めて、総合学習や地域学習などをしていくのですが、一方の子どもたちは、他の審査委員の方が皆さんご指摘されたとおり、やっぱり記憶のない世代にどんどんどんどん突入しています。そのギャップが年数を経るごとにどんどん開いてきているというのは、現場で実践をしている身として、子どもたちや先生方と向き合っている中でひしひしと感じています。

そうした中で、子どもたちには、将来、当事者性に押しつぶされないでほしいというのが私の1つの願いです。「あなたは被災地の何町で生まれたのだから、ここの復興をよろしくお願いします」みたいな、何かそういう意味を込めた学習や、地域の学びというものではなくて、今回、この作文に応募してくださった皆さんのように、何か自発的に疑問や関心が浮かんできて、調べてみたら自分の地域の課題だったとか、調べてみて経験してきたことが何か地域課題の解決につながるとか、何か自分の中から主体的に生まれてきた疑問や関心がたまたま被災地の課題だったというような、子どもたちにとっての独自の当事者性みたいなものを育んでほしいなということをメディア実践をする身として感じています。

子どもたちは、特に被災地の子どもたちは、メディアの取材を受ける機会がこれまで非常に多かったということもあって、インタビューの受け答えがとても上手だなということを、2012年ぐらいから取材を通してずっと感じてきました。恐らくニュースや家庭の中、また学校でいろんなことを聞かれたり、いろんな願いを託されていく中で、何か大人の空気を読んで良いことを言わなきゃいけないとか、こういうふうな発言をしたら大人の人たちが喜んでくれたみたいな経験の積み重ねが、もしかしたら子どもたちをそういうふうにさせてしまったのかもしれません。そこを乗り越えて、自分の言葉で自分の疑問や関心をいろんな人たちと議論をしていける人に、福島の子どもたちだからこそなってほしいと思います。今回のチャレンジ・アワードのような活動は、その大きな1つのきっかけになるのではないかということをすごく感じています。

――CANDLE JUNE委員

このチャレンジ・アワードが実施できたことをとてもうれしく思っています。

なぜ、どうしてもこれを立ち上げたかったかというと、震災や原発事故の記憶のない子どもたちが増えてきていますが、その家族たちは発災直後からどんなに大変なことが起き続けても、「この子たちが笑顔ですごせるために」と毎日頑張ってきたのだと思います。

子供たちは、その大人たちの背中を見て育ってきています。福島県民一人一人、皆さんに映画にしてもおかしくないような感動のエピソードがあると思いますが、県内では誰もが大変な経験をしているのでみんな、声高に経験を語れないのではないかと思います。

毎月11日、キャンドルナイトをずっと福島で続けています。それはそんな一人一人の声をキャンドルホルダーに

（次ページへ続く）

書いてもらうためでした。一緒にいる子どもたちには「将来の夢」を書いてもらってきましたが、キャンドルナイトを始めて5、6年目ぐらいから、子供達の夢が圧倒的に「人の役に立つ職業に就きたい」という内容が多いことに気づきました。
「自衛隊にはいりたい」「おいしゃさんになりたい」「消防士さんになりたい」
子供達の夢を実現させることも復興の一つと思っていましたが、同時に災害支援を受けた中で感じたとしたならば、災害支援という専門職がもっとできるべきでは?とも感じました。
大変な経験をした方々こそがこれからの支援者となるだろう。
そしてこれからの防災やまちづくりなどの提案にも欠かせない人材となるだろう。
物作りを仕事にしている自分の仕事の順番は 1想像する。2声に出したり書いたりしてみる（アウトプット） 3実際に作ってみるとなります。
福島のみなさんは1想像する。のところが経験するとしてみます。そして2のアウトプット。としてみたら3の実際に作ってみるまでがとてもリアリティがあるものとなります。
10年の節目とよく言われますが、実際に終わっていく支援があります。
風化が進む中で2030年にはSDGsのゴールドゴールという設定があります。
あらためて福島からのアウトプットと実際に作ってみる！というところを福島の子供達と始めていき、日本におけるSDGsの発表の場は福島県で3月11日がもっともふさわしいとなることが、本当の福島の復興であり、唯一もつ特別な経験が貴重な財産とのなり得るのだと考えています。
今年度から始めたチャレンジ・アワードに自発的に応募してくれた子どもたちを毎年表彰していけば、2030年には、100人以上の福島育ちの若きリーダーたちが、これからの未来を福島の経験をもとに世界に発信してくれることになると思います。
昨年9月ぐらいにこの企画を提案して、環境省の皆さんはじめ福島県の皆さんも、通常の行政機関ではあり得ないスピードで取り組んでくれました。来年度はもっといい形になって、より多くの子どもたちが、授業の一環でではなくて、自発的にトライしてもらえるような形をこれから作っていきたいと思っています。これからの10年がとても楽しみです。

――大山委員

今回のチャレンジ・アワードには、思ったよりも多くの応募があり、また、県外の方は関東までくらいかと思っていたのですが、それより以西の方にも応募していただいており、本当に嬉しく思いました。これも、環境省を始め、関係の皆様方の御努力の賜と思います。
また、内容についても、応募された方が自分で体験したり、調べたり、学んだりしたことだけではなく、それを踏まえて自分でしっかり考えて提案されていることに感心しましたし、とても頼もしいと感じました。作文や論文としてまとめる段階で、自分としっかり向き合った経験は、これからの人生の中できっと生かされていくと思います。
評価については、提案の内容だけではなく、具体的な行動の有無についても考慮しましたが、受賞の有無にかかわらず、応募者それぞれが提案したことは、福島県の将来につながるものですので、これから何らかの一歩を踏み出していただくことを期待しています。

――高野委員

今回のこのコンテストは、10月に入ってから具体的な話が動き始めたと記憶していますが、最初、中学校、高校にこのコンテストを案内してどれだけ作品が集まるのかなというところは大変不安でもありました。結果として、中学、高校ともに、たくさんの作品が集まって、それぞれ力作ぞろいで非常に良かったと感じております。
ある高校の先生からは、今回生徒に取り組んでもらった感想として、やはり生徒にとって原子力発電事故は記憶の無い過去の話になっていて、今の高校生であれば、新型コロナウイルスの影響の方が一番の環境問題になっている。そういうことを実感した上で、高校教員として、原子力発電事故を風化させないで、生徒にしっかりと教えながら、復興に対する考えを育成していかなければいけないということを改めて考えた。このチャレンジ・アワードによって、生徒だけでなく、教員としてもそういうことを考えるいい機会になった、という感想をいただいています。全体を通して、やはり作品を見ても非常にいい内容のものがあったので、有意義なコンテストであったと思います。

――田代委員（三木委員の代理）

「ああ、この子たちには、実体験としての記憶がほとんどないんだな」ということが、まず一番印象に残りました。福島に住んでいるというだけで、もうみんなが被災者みたいなイメージで外から見られていると思うのですが、中学生にとっては、3歳ぐらいで体験はしているけれども記憶としてはほとんど残っていなくて、家族から聞いたり、後から自分たちで調べたりして学んだ、現実と歴史と、誰かの体験を聞いたことが交じっている感じで、ちょうど内側の目と外側の目、両方が育っている世代なんだなというのを、作文を読ませていただきながら強く感じました。同時に、今、福島に住んでいる子どもたちが、一度福島の外に出て、外からの目を体験したり、別な地域での暮らしを体験したりした後、それでもやっぱり福島がいいと帰って来る場所にこれからなっていけたらすごくいいなとも思いながら読みました。10年経ったから区切りではなく、子どもや若い人たちと、この後の福島をどうしていくかを一緒に考えて、一緒に育てていけたらいいな、環境省はそのためにできることを精いっぱい一緒にやっていきたいなと思います。
何人かの委員の方からも意見が出ていましたが、今回のコンクールだけで終わりとか、10年で一区切りという事ではなく、この後どうしていくかというところを、子どもたちと若い人たちと一緒に考えて、福島の未来を一緒に創っていけたらいいなと思います。今回は若い世代の声を聞くとてもよい機会を与えていただいてありがとうございました。

――則久委員

各委員と同様ですが、多くの作品を拝見して、10年たった現在、中学生には震災や原発事故の記憶がほとんどない。多少なりとも記憶があるのは高校生以上なのだと今回改めて認識いたしました。
環境再生に携わった方々など100人の方にお話を伺った「福島環境再生100人の記憶」という書籍を作っています。そちらは大半の方が40歳以上であり、ご年配の方のお話を数多くお聞きしているものですが、こちらのチャレンジ・アワードでは、中学生や高校生のお考えがよく分かり、我々としても未来志向の施策に取り組んでいく上で、多くのヒントをいただいたように思います。
大学生部門の慶応大学の学生の皆さんの作品にもありましたが、環境省では、大熊町において「聞き書き」活動をNPOの方々と一緒に進めています。現在は、県外の大学生に行ってもらっていますが、いずれは福島の子供たちに「聞き書き」に参加してもらい、震災の記憶や以前の町の様子や暮らしがどうだったかということを伝えていってほしいと思います。
昨年度、この「聞き書き」に私も参加したとき、大熊町のご年配の皆さんが、「この機会に、全く新しい世界最先端の町を作ってほしい。若い人たちが住みたくなるような町を。」とおっしゃっていたのを覚えています。他方、一昨年末に山手線の車内モニターで、いわき総合高校の演劇部の皆さんのインタビューを拝見したとき、ある高校生が「都会の大学を出てふるさとに帰ってきても、知らない町になっていることが怖い。」と話していたのが強く印象に残っています。
環境再生事業では家屋の解体を進めていますが、それは、高校生たちにとって記憶のよりどころである町並みや学校をなくしてしまうということでもあります。その観点からも、チャレンジ・アワードや「聞き書き」活動などいろんな手段を通じて、次の世代に記憶を継承していくことに貢献していきたいと考えています。

最優秀賞
— 環境大臣賞 —

里山モデル福島への道

福島県立ふたば未来学園中学校・2年　林（ハヤシ） 佳瑞（カズイ）

土地が自然の力でよみがえった、本来の環境が復活した。人間が滅びれば環境は復活すると日々謳っている科学者たちが存在する。アスファルトで作られた道路に草木が生い茂り、イノシシなどの野生動物が朽ちた店内を自由に走り回る。そんな双葉郡の映像を見た一部の科学者が嬉々として声高に叫んでいるのだ。私はそんな科学者たちに言いたい。人間と他の生物との共生は不可能だというデマを流さないでほしいと。そして知ってほしい。人間とその他の生物の両方で成り立つ里山という環境があるということを。

震災前から福島県内の昆虫の調査をしている県農業総合センターの三田村氏によると、元々双葉郡は生物の宝庫だったそうだ。特に双葉町はタガメの多産地として全国的にも注目されていたが、2012年の調査でタガメが完全に消滅したことを氏は確認した。原因は放射線ではない。人間が稲作をやめ、水田に水が入らなくなったためだ。タガメ以外にも里山に依存していた生物の大半は、人間がその土地を離れざるを得なくなったとき共に姿を消した。里山は人間と生物で成立する環境だ。人間がいなくなれば、生物は生息が困難となり、その場を去ってしまうのだ。しかし、帰還困難区域が解除されたその土地で再び人間が農業を始めると、驚くことに消えた生物が戻ってくるケースが多いと氏は言う。この話を受け私は、どんなに荒廃した地でも元の環境を取り戻すことは不可能ではないという結論に至る。

2015年に達成期限を迎えたMDGsに代わり新たに国際社会共通の目標として2015年9月、SDGsが定められた。その目標15「陸の豊かさも守ろう」では陸上生態系の保護や生物多様性損失を阻止することが掲げられている。そのような中で里山による環境保全計画はアジアを中心に広まりを見せている。しかし残念なことに、まだ全世界で実行されるまでには至ってはいない。人間と他の生物との共生は不可能だというデマを流す人、そのデマを信じる人がいるためだ。里山の可能性でこのデマを解消したい。人々の生物多様性への意識を高め、絶滅の危機に瀕した生物を救いたい。そこで福島、特に双葉郡を里山の可能性の継承地にしたいと考えている。原発事故の恐ろしさや風評で注目されていることを逆手に取り、世界中に里山環境の価値を発信する地として再出発をするのだ。

双葉郡では常磐自動車道や常磐線の全線開通、医療機関の再開など生活に必要なインフラは復旧しつつある。そのような中、私は学校の総合学習活動の中で双葉郡川内村の昆虫を日本全国に発信しようとしている。具体的には観察会や講演会などで興味を持ってもらい、定住人口や交流人口を増やそうと考えているのだ。生物多様性での地域おこし。原発事故福島から里山モデル福島へ。これが私の最初の一歩。私のような生物好きな子供が悲しまない福島、世界を作るための最初の一歩がいつか大きな道となることを信じて踏み出した最初の一歩である。

最優秀賞
— 環境大臣賞 —

蝶の研究から学んだ「自然と共生する福島」の実現方法

福島県立福島高等学校（普通科）・1年　守谷（モリヤ） 和貴（カズキ）

私は小学生の頃から福島県の蝶類を調査している。各地で蝶との出会いがあり、感銘を受け、それぞれが思い出深い場所だ。

福島の自然が好きだという人は多いと思う。レジャー施設なども魅力的ではあるが、これからの新しい福島を作り上げるには、飾らない自然環境を元手とした「自然と共生する福島」を実現するべきだと考える。昆虫採集にこだわる必要はない。釣り、山菜取り、登山、天体観測など、大自然の中で楽しめる事はたくさんある。

しかし、県内の自然環境はここ30年ほどで著しく悪化し、特に原子力災害以降顕著になった。それは多くの研究で言われているが、私自身も調査を通して痛感している。よく蝶は「自然のバロメーター」と言われる。過去の記録と照らし合わせ調査を行っても、記録のあった蝶が全く見られないことはよくある。蝶の消失は、そこの自然環境に何らかの変化があったということなのだ。そして、その変化は大抵が人間の影響によるものだ。原因は大きく2つ考えられる。

1つは、直接的な環境破壊がある。例えば、過剰な森林伐採や開発だ。蝶が食べる植物ごと失われてしまうため、影響は短期間に現れる。今の福島県で最も深刻な要因は、再生可能エネルギーの急激な開発だろう。原子力災害以降、県内の再生可能エネルギーの進展はすさまじい。再生可能エネルギー自体は賛成であるが、現在のやり方には問題があると考える。広大な山林を切り開いて太陽光発電や風力発電を建設する光景は目に余るものがある。それは有限の自然環境ありきのエネルギー生産であり、開発後には自然環境の再生ができないことに問題があるのだ。

もう1つは、森林管理の放棄による良好な自然環境の衰退である。過疎化により、森林が荒れ果て、生息環境が悪化し、絶滅に追い込まれる生物が出ている。例えば、原子力災害によって一時立ち入りできなくなった浜通りの山林では、荒れ放題の場所が生じている。蝶には、特定の食草・食樹が存在し、それらがないと生息できない。種によっては成虫が好む環境があり、開けた草原などを生息環境とする蝶類にとっては計り知れない影響がある。

そこで、自然環境を保全する方法を考える必要がある。例えば、既存の建築物や空き地に太陽光パネルを設置したり、風車を小型化し各世帯の屋根や道路沿いなどに設置したりするなど、自然環境にすぐ手を伸ばさず、身近な都市環境で最大限の工夫をすることにより、自然環境を保全するべきである。農村部では、良好な自然環境を維持するための適切な管理を継続する必要がある。例えば、杉や檜などの県内産樹木の需要喚起だ。適切な管理を行い、森林荒廃を防ぎ、かつ地域の貴重な経済資源として活用する。また、天然の草原を利用し、地形を生かした牧場やスキー場などに活用することで、広大な面積の山林の開発を防ぐことができる。また、自治体は自然環境管理を専門とする地方公社を組織し、管理者を雇う。自然環境のエキスパートを育成し、管理が行き届くようにする。各自治体で取り組みを始めれば、かなりの雇用ができ、ポスト・コロナ社会の失業者増大、さらに過疎化も解消する。また、農村生活や狩猟・採集など、自然の営みの体験型プログラムを実施することで、次世代へ自然環境の特性と地元住民の生活を継承する。さらに集客にもつながるため、地域の経済活性化が見込める。

このような取り組みによる自然環境の維持によって生き延びることができるようになる生物は、蝶をはじめとして無数に存在する。

自然と共生するにはまだ課題がたくさんある。しかし、原子力災害を経験したこの10年間で広範囲な課題に対する解決力が培われたはずだ。今こそ、都市での再生可能エネルギー生産への切り替え、今ある自然環境の保全、その魅力を最大限に生かした観光資源の創出によって、「自然と共生する福島」の実現のため、行動を起こすべき時である。

最優秀賞
— 環境大臣賞 —

芸術で狼煙をあげよう

立正大学心理学部臨床心理学科・4年　横山（ヨコヤマ） 葵（アオイ）

福島は震災で多くのものを失った。突如降ってきた絶望は大きなマイナスからのスタートを目の前に突きつけた。この十年でマイナスはゼロになり、新たに生まれ変わるための基盤を整えた。そして今、福島に最強の武器を持って新たなステージへと踏み出してほしい。福島は日本で最も新しいステージに挑める可能性を秘めているのだから。
目指す新たなステージは「芸術の町・福島」。そして、最強の武器こそ、東日本大震災からの復興である。

芸術には凄まじい力がある。芸術は、時に経済や武力、政治よりも人を動かす力を持つのである。それは芸術が常に更新されているからだ。例えば、一つの流れの発展や反抗。政治や宗教からの派生、反骨精神。技術の進歩による創作の広がり、等。更新される背景には、必ず歴史や世界、人の変化がある。そして、それらによって生まれた作品や流れは、変化の象徴になるのである。アメリカはこれをよく理解していた。第二次世界大戦によって確固たる地位を築いたアメリカは、世界の覇権を握ったことを象徴するために、自国の芸術の更新に奮闘した。連邦美術計画と呼ばれる大規模な芸術家の支援を行ったのである。軍事力、経済力、政治力だけでは示せない、前向きな新しい風を吹かせる芸術の覇権を握ることが目的で、詳細は省くが、実際に戦後、パリからニューヨークへ芸術の中心を移すことに成功している。現代アートの風潮をもたらしたのだ。芸術の新たな発掘のよい手本である。

もう一つ。芸術そのものに強い発信力がある。四年に一度のオリンピックで国の伝統や文化が披露されるのは、国の顔になる力を持っているからだ。エッフェル塔や太陽の塔、自由の女神はまさに時代の変化の象徴である。パブロ・ピカソは絵画の力で反戦と平和を世界に強烈に訴えた。日本の歴史を振り返ってみても、かの有名な千利休は戦国時代において高い芸術力で一時はとてつもない影響力を持ち、それを恐れた豊臣秀吉によって町人としては異例の切腹をさせられている。それほど、芸術というものは武力や政治などよりもよっぽど抵抗なく人々に影響を与えるのだ。

福島は多くを失ったからこそ、新しい町になった時の変貌ぶり、差が大きな影響力になる。新たに生まれ変わる象徴をつくり、震災の爪痕や、福島に根付く文化・芸術はもちろん、日本・世界の最新の芸術にアンテナを張り福島のもとに集結させよう。日本が誇る現代アートの芸術家・村上隆など、福島に芸術性を見出す人は既に現れている。震災・原発の事故が前代未聞の規模であった分、「芸術家×福島」は今までにない前代未聞の芸術を生み出すのではないか。東日本大震災により世界に名が知られるようになった福島が芸術の町になれば、世界は放っておかないだろう。今なお環境問題は世界に根を張り続け、至る所で大きな気象変動、災害が今後も繰り返されるだろう。復興の最良の手本を示すために、環境への取り組みの尽力を伝えるために、芸術の力で人を呼び込むのである。

環境問題とは変化を感じづらい。十年を経て確実に良くなっている福島の環境に人々は関心が薄く、目に見える変化が少ない分把握もしづらい。そもそも、十年経ったことで、東日本大震災が過去のものになりつつあり、忘れられはじめている。芸術の力で、福島を過去にせず、常に更新していこう。

環境活動家のグレタ・トゥーンベリさんを考えてみる。2018年の彼女の演説は世界の人々に多大な影響を与えた。もちろん人によって捉え方、賛否は違うが、彼女によって環境問題を知る、考えるという切っ掛けがばら撒かれたのは紛うことなき事実である。ずっと前から存在していた世界の環境問題に、強力なメッセージを放つ若い少女という話題性、意外性がスポットライトを当てたのである。福島も同じだ。環境問題、取り組みをただ発信するだけでは今の時代届かない。震災が忘れられないために、環境に関心をもってもらうために、芸術と象徴を手にしよう。もう震災を悲観的にだけ発信するのはやめよう。震災が背景にあるからこそ伝えられる強いメッセージを無駄にしてはいけない。芸術という明るい前向きな力で、世界からも注目される新たな町になれば、同時に復興の力強さ、環境への甚大な努力も必ず人々に届くのだから。

参考文献：現代アートは資本主義の行方を予言する　山本豊津 PHP研究所 2015

優秀賞
— 福島県知事賞 —

ワーケーションで福島に元気を！

猪苗代中学校・1年　吉田（ヨシダ） 昊生（コウセイ）

二〇二一年三月十一日、東日本大震災から丸十年の節目を迎えます。当時三歳だった僕は、震災当日のことはもちろん、その直後の福島県内がどれほど大変な状況だったかという記憶はありません。しかし、中学一年生となった今、僕も福島県の未来を考え、そして担っていく一人となりました。

平成二十三年（二〇一一年）三月一日当時の福島県の人口は、約二百二万人、震災一年後の平成二十四年三月一日現在の人口は、約百九十七万人と約五万人も減っています。しかしながら令和二年（二〇二〇年）十一月一日現在の人口は約百八十二万人と、およそ二十万人もの減となっているのです。住所を移さずに避難されている方もいるので、実際にはもっと人口が少ないのではないでしょうか。県外の避難先から戻られない方もいて、全国的に出生率も低下している今、この先の福島県の劇的な人口増加は望めないと思います。

そしてその人口の減少に伴い、空き家が増加し続けています。ここ猪苗代町も例外ではありません。そこで提案したいのが『空き家を利用したワーケーション』です。

ワーケーションとは、観光地やリゾート地でテレワークを活用し、働きながら休暇を取る過ごし方のことです。昨今のコロナ禍により在宅勤務が推奨され、働き方も大きく変わり、IT機器さえあればどこにいても仕事ができる世の中になりました。自分の職場を自分で自由に選択できると言えるでしょう。

このワーケーションで物件を利用してもらうべく、一軒家なりアパートなり、借上げを希望する家主から自治体が一括借上げし、更にワーケーションを希望する人に貸し出すというのはいかがでしょうか。涼を求める人は夏場だけ、雪を求める人は冬場だけ、または年間を通して借りてもらいその人の好きな時に好きなように来てもらう。月単位でも季節単位でも年単位でも選択は自由。光熱水費の契約と管理も自治体が行い、かかった分だけ家賃と一緒に支払らってもらうようにすれば、面倒な手間もなく利用することができると思います。

ワーケーションで滞在してもらっている間は、きっと地元の商店や飲食店などを利用するはずなので、少なからず経済も潤います。また、気に入ってもらえれば、その住宅の購入や将来的な定住も視野に入れてもらえるのではないかと考えます。

四季折々の風情豊かな福島県。ワーケーションにはもってこいの素晴らしい場所だと思います。

急激な人口増加や大きな経済発展を目指すのではなく、僕が提案したように福島県の魅力を知ってもらえるような小さな発信を積み重ね、人々が集い笑顔の溢れる福島県にしていきたいです。

優秀賞
— 福島県知事賞 —

「think locally act globally」
～東京都から只見町で暮らしてきづいたこと

福島県立只見高等学校・2年　三宅（ミヤケ） 実美（ミミ）

「フクシマ」が「福島」と漢字表記されるにはあと何年かかるのだろうか。

10年前に発生した、東日本大地震とそれに伴う原発事故により、今でも仮設住宅での生活を余儀なくされている方がいる。

私が避難の方々の存在を意識するようになったのは高校生になってからだ。私は東京生まれ東京育ちであるが、山村留学制度を利用して福島県立只見高等学校へ入学した。東京とは全く異なる田舎での生活は驚きと発見の連続だった。入学するとまず身体測定に加えて放射能検査があることに衝撃を受けた。私がすっかり忘れていた「放射線」の存在が福島では当たり前にある脅威なのだと知った時、悔しさに似た感情が湧き上がってきた事を強烈に覚えている。それと同時に私は初めて東日本大震災の悲惨さが続いていることを痛感した。

期せずして、現在、世の中は新型コロナウイルス感染という社会的危機の中にある。大震災から10年目を目前にして、多くの命が理不尽な力によって奪われているのだ。今までの生活は一変し、価値観も大きく変化している。テレワークやオンライン会議などが普及したことで、場所を問わず働くことが可能となり、都会で暮らす必要性を感じなくなった人も少なくないのではないだろうか。これは福島県にとって大きなチャンスとも言える。この機会に福島に人を呼び込むことが出来れば、それこそ大震災からの復興の一助となりえるのだ。

そこで私は、福島県にある空き家をワーケーション施設に利活用するという案を提案する。福島県の空き家率は年々増加しており、平成30年に総務省が行った調査では全体の14%を超える123500戸もが空き家という結果だった。また、「空き家の発生に伴う問題の有無」を問うアンケートでは、「問題あり」と答えた人が86%を占めた。問題の内容としては、空き家の放置が原因となる意見が多く挙がった。そんな空き家を正しく活用することが出来れば、コストも抑えられ、近年深刻化する空き家問題の解決にも繋がる。この提案は、利用者、売主、社会の「三方よし」の持続可能なビジネスモデルだ。

私は、只見町で二年間生活している中で「さなえさん」という70代のおばあちゃんと仲良くなった。地域のイベントで知り合って以来、何度も家へ訪れては農作業を手伝うお礼に夕飯を頂いている。雪で農作業が出来ない時には、肩をもんだりする。この町では、一人一人が自分の役割を認識してお互いに支えあっているのだ。そんな人と人との繋がりの強さは、災害時にも確実に応用できるのではないだろうか。特に、これまで多くの自然災害に見舞われてきた福島県では、災害のリスクに対するノウハウを個人レベルで有している。そんな住民同士が一丸となって助け合うことで被害を最小限に抑えることが可能となる。

翻って、私は15年間暮らした東京では近所付き合いを全くしていなかった。むしろ、人付き合いを億劫に感じていた。2018年に内閣府が行った「社会意識に関する世論調査」では、「地域の人たちとよく付き合っている」の回答はわずか18.3%でしかない。加えて、ソーシャルディスタンスを保たなければいけない今、コミュニケーションの希薄化はますます進んでいると推測される。しかし、そんな時代だからこそ逆に人と人とのつながりを大切さを実感した。相互扶助の精神で成り立つこの小さな町に、新しい社会の答えがあるのではないだろうか。

環境問題を解決する上で非常に重要とされている言葉に「think globally act locally」というフレーズがある。「地球規模で考え、足元から行動せよ」という意味であるが、むしろ、地方モデルこそ世界へ発信すべきではないだろうか。なぜなら持続可能で革新的な社会は地方にこそあると感じるからだ。福島が新しい社会のモデルとなり新たな可能性を示す事で追随するように都市へ、そして世界へとその輪を広げて、逆に「think locally act　globally」として、持続可能な社会を目指したい。

優秀賞
— 福島県知事賞 —

study×vacation

慶應義塾大学環境情報学部・1年　中川（ナカガワ） 佳子（カコ）

10年後の福島は「学生がたくさん訪れる場所」になって欲しい。町が活気付くためには若者の力が重要だが、少子高齢化が全国的に進み、出生率をあげることは容易ではない。そこで、福島出身の若者を増やすのではなく、福島に思い入れのある若者を増やすことに力を入れていくのはどうだろうか。

キーワードは「ワーケーションの聖地×学生」、つまり大人向けの「work×vacation」ではなく学生がオンライン授業を受けるのに適した「study×vacation」である。ポスト・コロナ社会における新しい学生と地方の関わり方を提案したい。

現在、オンライン授業が当たり前となりキャンパスにいなくても授業を受けられるようになった。地方から上京した一大学生（新入生）として、コロナ禍の生活を振り返ってみると、友達もいない知らない土地でひとり部屋に籠もってパソコンとにらめっこ、もしくは実家で、家族は普通に仕事や学校に行き友達と遊んでいるのを横目に、一人部屋に籠もって課題をしていた。ニュースでは大学生が精神的にも金銭的にも困っている、自主退学、自殺者が増えているなどマイナスな現状を目の当たりにしてきた。

そんな中、サークル活動で福島に2日間訪れる機会があり、原発事故の資料館や立ち入り禁止区域のフェンスを見た。たった2日間の出来事でも福島への思い入れができ、今後も福島の復興を見届けたい、関わっていきたいと思えた。そこで、東京からアクセスがしやすい立地を生かし、関東圏の大学生がコロナ疲れをリフレッシュできる場を用意することで、福島への関係人口を増やすことができるのではないかと考えた。そして将来的に福島に移住もしくは関わりたいと思ってもらえる人も増えることを期待する。

具体的には、大学生が短期で福島のどこかに宿泊し、大学の授業を受けつつも自然に囲まれてリフレッシュできる機会を用意する。地域クーポンを発行することで学生は街に出て食事をし、テイクアウトをして宿で酒を飲む。休日には、福島の震災からの歴史に触れられる機会や福島の農林水産などで日雇いのお手伝いの場を用意する。ここで福島の歴史や現状を体験することができれば、風評被害を取り除くことにつながるかもしれないし、福島に思い入れができるかもしれない。またいろんな大学の学生が集まるので、学生同士の研究発表の場があれば、他分野の研究に触れることで自分の研究を深めることができるかもしれない。このように学生にとっても地域にとってもメリットがある。また大学生を対象とした理由の一つには、福島県浜通りに大学が少ないことも挙げられる。地域にとって若者は町を出ていくのが当たり前だが、この機会を利用して短期間でも若者が福島に集まる。この機会を目にした地元の子供たちは自分の町には魅力があることを実感するかもしれない。それにより地元の子供たちが福島を愛し、将来福島に戻ってくることも期待できる。また、学生たちには福島で子供たちに教える勉強会やイベントを企画してもらうなどのワークショップを行い、より地域と密着した体験ができるようにしたい。同様の取り組みとして、県内に大学が少ない和歌山県では「大学のふるさと」制度を独自に実施しており、各市町村が都市部の大学と連携している。今回提案した福島と学生の関わりでは、大学と市町村をつなぐのではなく、一学生と福島をつなぐ良い意味で敷居の低いものである必要がある。なぜなら授業の一貫という位置付けとなると単位など余計なものが関わってしまうからである。現状の大学生は夢見たキャンパスライフを送れず旅行も自由にできないため、このような機会は記憶に強く残るだろう。つまりこの機会では、いかに気軽に参加してもらうか、福島の将来性や魅力を若者に見せられるかが重要である。

参考サイト：和歌山県、和歌山が故郷になる「大学のふるさと」制度について

優秀賞
— 教育長賞 —

「福島、その先の環境へ。」

福島県立ふたば未来学園中学・2年　阿部（アベ） 一葉（カズハ）

まもなく平成23年3月11日の東日本大震災から10年が経とうとしています。

地震が起きた時、私は4歳でした。立てないほどの揺れが起き、付近では物が落ちていたり地面が割れたりしていましたが、自宅に大きな被害はなく、そのため、停電や断水があったことをおぼろげながら覚えている程度です。私にとって東日本大震災の記憶はそれほど多くなく、地震があった次の日の母の誕生日会が出来なかったことを覚えているというくらい、呑気なものでした。

震災後、両親や大人の会話の中で地震、津波、原発事故や放射線、放射能などの言葉を耳にすることはありましたが、私の生活に影響することなく、地震のことは気にも留めていませんでした。

意識し始めたのは小学4年生の頃です。「コードF」に参加したのがきっかけでした。「コードF」とは、県内各地に仕掛けられた謎解きをするイベントです。誘ってくれた父と共に県内のいろいろなところを回りました。裏磐梯から見える飯豊山、金山町の炭酸水、昭和村の旧喰丸小、棚倉町の城跡、古殿町の越大の桜、相馬市の松川浦など訪れた場所は枚挙に暇がありません。双葉地方にも行きました。そこで目にしたものは、道路脇にある窓が割れた数々の建物と立ち入り禁止のバリケード、時が止まった時計、そしてうず高く積み上げられた黒いフレコンバック。幼かった私はとても衝撃を受けました。

双葉地方について少し調べてみると、東日本大震災と原発事故に伴い約16万人の方々が避難し、現在も約4万人の避難が継続していること、さらに震災による直接的な死者数が県内全体で約1,600人であったのに対して、震災関連死者数は2,300人と直接死より多く、現在も増えており、かつ、そのほとんどが双葉郡であること、震災関連の自殺者が現在もいることなど、東日本大震災は10年前の災害だけでなく、今も継続して続いている災害であるとわかりました。

双葉地方について調べた時、事故を起こした福島第一原子力発電所が双葉地方に設置されたのは、日本のエネルギー需要があったことと、双葉地域に雇用の場が必要だったことが主な理由だったことを知りました。福島第一原子力発電所の廃炉作業が進められている現在、これに代わるエネルギーが必要だとおもいます。

私は新しいエネルギーとして「波力発電」を提案します。福島県は水力、地熱、太陽光、風力など再生可能エネルギーの先進地です。波力発電は波の力で発電します。波力発電は海でしか出来ないので、福島県のここでしか作れない再生可能エネルギーになると思ったからです。波の力は天候に左右されず、波の力が0という日はほとんどありません。発電量は太陽光発電の約20～30倍、風力発電の約5倍と発電効率が高いのも魅力の一つです。実際、浪江町にある請戸漁港で波力発電所が検討されているそうです。

日本では、原発事故はここ福島で起きたことで、他に例がありません。それは福島の弱みでも強みでもあると思います。あの日津波でたくさんのものを奪われた双葉地方だからこそ、波を資源にし、まだ続いている東日本大震災に終止符を打つべきだと思います。

優秀賞
— 教育長賞 —

私たちが変えていく、福島の未来

郡山高校・2年　秋山（アキヤマ） 風凜（フウリ）

東日本大震災から10年。当時小学1年生だった私は高校2年生になった。しかし、福島の復興はまだ途上であると言わざるを得ない。震災から10年が経ち、震災当時の記憶の風化が懸念される一方で、福島第一原発事故の影響や福島に関する根拠の不確かな情報を見ることも未だに少なくない。また、震災から10年経った今でも、未だに福島県にネガティブなイメージが根付いていると実感する時がある。こうした福島の現状を変えるために2つのことを提案したい。

1つ目は福島の情報を正しく発信することだ。私が情報発信の重要性を実感したきっかけは、昨年参加した「ナラティブスコラ2020」というプロジェクトだ。活動の一環として震災当時の状況やこれまでの復興の歩みについて学ぶ機会があった。この活動を通して、私は2つのことに気づかされた。1つは私自身がこれまで震災のことについて「知ったつもり」でいて福島の現状を正しく理解できていなかったこと。そしてもう1つは、これまで震災と原発事故の両方を経験した例は無く、福島県が発信する情報は非常に価値があるということだ。

福島の情報を正しく世界へ発信するために重要なのは、「福島から世界に情報を発信する場」を設けることだ。代表例として福島県白河市の「EMANON」というコミュニティカフェを挙げる。このカフェでは高校生が地域の情報を発信する活動が盛んに行われていたり、情報を発信・共有する様々なイベントが行われたりしている。このカフェのように地域と距離が近い情報発信拠点を福島県内各地に設けることで、福島の情報が発信しやすくなるのではないだろうか。また、震災当時の記憶だけでなく、福島の「今」を発信することも重要だ。震災の当事者でない人々にとって、震災は既に「過去」になりつつある。だからこそ、福島の「今の日常」をリアルタイムに発信することが、結果的に復興の歩みをアピールすることに繋がると私は考える。私たちの発信を通して福島県の現状、そして未来を変えていく。そういったきっかけが生まれる場を設けたいと強く思う。

2つ目は新型コロナウイルスの流行に伴い、リモートワークが普及している今、リモートワークに最適な環境を整えることで、コロナ禍に活きる新しいまちとして地域の活性化を目指すことを提案する。1つの例として郡山市を挙げる。郡山市は首都圏から約80分というアクセスの良さに加え、都心に比べて面積が広いため、密を回避しつつ都心から比較的気軽に訪れることができる都市である。現在郡山駅前ではコロナ禍による経済的な打撃から、飲食店を中心に企業が撤退し空きテナントが増えている問題がある。このような状況を鑑みて、郡山駅前の空きテナントを有効活用し、リモートワークに集中して取り組めるコワーキングスペースを設立することを提案する。このような場所を設立するには、まず空きテナントを格安で貸し出す必要がある。この点のメリットとして、初期費用投資が抑えられるという点がある。また、Wi-Fi設備の整備も重要だ。最近ではオフィス専用のWi-Fiサービスを提供している企業が増えているため、そうした企業とも連携してインターネット環境を整えることでオフィスとしての利便性を高めたい。さらに、コワーキングスペースに常駐のスタッフを設置することにより万全の態勢で感染症対策ができる。加えて、近くの飲食店と提携し食事の配達・提供サービスを行えば、コロナ禍で苦しんでいる飲食店の支援に繋がるだろう。東日本大震災から10年が経過した今だからこそ、今の時代に最適な取り組みを始めることによって地域の復興と活性化を目指していくべきではないだろうか。

以上2つの提案をふまえ今を生きる私たちがアクションを起こし、福島の未来を創り上げる大きな一歩を踏み出していきたい。

優秀賞
— 教育長賞 —

故郷になる町

慶應義塾大学 環境情報学部・1年　鈴木（スズキ） 愛奈（アイナ）

「夜が明けきらないうちに、息子が避難しろって来たんです。「え？避難ってどこに行くの？」という感じで。「どこに行けばいいの？西？南？東？どっち行けばいいの？」って、わからない。南に向かって、いわきに向かって、家族も一緒に連れて避難しました。次の日に爆発したということで、見て悲しくなって、さらに恐ろしくなって、じゃあ今度はどこに行こうかということになって。」

これは大熊町で育ち家族と暮らしていた夫婦が10年前のことをお話してくださった時の記録の一部である。私は昨年から環境省とNPO法人「元気になろう福島」の方々と行っている「聞き書き活動」（お話を伺い文章にする活動）に参加している。被災した方々からのお話を通して私は、あのバリケードの奥の町や、どこまでも続く人気のない草原の上にあった人情と活気に溢れた町と出会い、福島のふるさとを愛する人々の想いに胸を打たれた。私は、福島の未来に必要な新たな開発の上に、残したい福島の町を創造することを提案したい。それは、企業と被災した農家、都市部の会社員と地元の人々が共同で町づくりを行う”ふるさと構想”である。

まず聞き書き活動の際に代々農業を営む方の、誇りを持って守ってきた土地を子供たちに残せない悔いをお聞きしたことから、福島の農業に目を向けたい。他の場所で再建しても、風評被害や天候など難しいと語っておられ、実際に高齢化の問題も相まって耕作放棄地の課題などが報告されている。現状を脱却するためには、農林水産省も基本計画に盛り込む「スマート農業（ロボット技術やIoT・ICT等の先端技術を活用して超省力・高品質生産を実現する農業）」の実現による農業の大規模化など、これからの農業の形に対応していくことが求められている。被災により農地を失った人々や風評被害や高齢化で継続が不可能な農家に対して、企業が財源を提供することで、福島の農業の再生をはかる。課題となるのが、機械化が進んでも人手が必要となる場面は多く残されることと風評被害が続くことであり、労働人口を町に呼び寄せると共に、福島を知ることで”知らないことによる差別”を減らすことが必要である。そこで適する人材と考えられるのが、安定した収入を求める一方で農業や自然と関わる生活に興味を示す若い層である。実際に、人材派遣などで知られるパソナグループでは若い世代の農業を応援する事業を展開している例がある。

そしてコロナウィルスの感染拡大により、現在多くの企業でリモート業務が広がり、出勤を必要とする業務との差別化が図られている。これは社員が自らの時間を有効活用することにつながると考え、聞き書き活動で福島の農家の方々が口々に言った「兼業農家」という言葉を思い出した。保育士や、土木の職人、原子力関連の会社員と兼業で農家を行っていたことを考えると、企業に勤めながら兼業農家として労働力になることが可能なのではないだろうか。

一方で、実際に移住することは共働き夫婦の働き場所の違いや子供の学校の問題など現実的でない。そこで、新白河、郡山、福島駅など都心部からのアクセスが容易な福島の利便性を活かして、完全に福島県に移住するということではなく、都心部に家を構え勤務をしながら、月の何割かを福島で過ごしたり、収穫など人手を必要とする時期にまとまって滞在する形で実現できると考える。こうしたワーケーションの地を整備するにあたってまず必要となるのが、居住空間兼ワークスペースであり、都市部の人々がふるさとに求めるニーズ、例えば自然を感じられる木造住宅などの整備が求められる。それは新たな町づくりの一環として、ソーラーパネルの設置や自家発電の環境整備などを進めることが容易である。他にも駅から町までの移動を含め地方では車が必須となることから、町をあげての電気自動車乗り合いシステムや、公共交通の無料化などを進めることで、国際的に重要視される脱炭素社会、環境に優しい町のロールモデルとしての役割を担うことができると考えられる。加えて、幼児・学童保育の充実化や児童の長期休暇中の夏季学校の整備など子育て支援を充実させることで、家族を巻き込んだ町づくりと環境教育に期待でき、介護施設や遠隔医療と実病院の一体化などで介護や老後を見据えられる、安心できるふるさと作りを進める必要があるだろう。

最後に、地元の伝統行事をイベント化し町の人々が一体となる空間をつくりたい。聞き書き活動で、地元の祭りとその歴史を熱く語る方々の姿を見て、大人から子供たちに伝統を継承し、思い出を重ねていくことで「ふるさと」としての町が完成するのではないかと感じた。都市部で生まれ育つ世代が増える今、必要な温かさがきっと福島に創れるのではないだろうか。

参考文献：髙木 亨・瀬戸真之（福島大学うつくしまふくしま未来支援センター）『原子力災害による旧避難地域における耕作放棄地の現状』/
庄子 元　『福島県西会津町における耕作放棄の抑制メカニズム』/脱炭素へ公共交通支援を　日本経済新聞2020年12月11日/
パソナ地方創生ファンドHP/ジブン農業HP

入　賞

「福島」から「世界」へ

福島県田村市立船引中学校・2年　秋元（アキモト） 椋太（リョウタ）

東日本大震災から十年を迎えようとしています。福島県では大地震の被害に加え原子力発電所の事故と過去に前例がない出来事に見舞われました。十年たった今でもさまざまな課題があり、復興が完全に果たされたとは言い切れません。

私の故郷は双葉郡川内村です。原発事故による避難で村を離れて生活していますが、今でも私の故郷は「川内」であると日々思っています。

私たち家族は原発事故後、親戚を頼りに東京都や埼玉県で数年間生活しました。幼かった私ですが、避難先での生活は楽しい思い出ばかりです。あとになって母が、「誰も知り合いのいない土地に、しかも母子のみでの避難で不安が大きかったが、避難先の方たちが温かく迎えてくれたので感謝しかない。」と言っていました。私は、現在住んでいる田村市でも仲のよい友人に囲まれ、勉強や部活動に一生懸命取り組むことができています。

事故が起きた原子力発電所について、漠然と自分の考えを持ちながら、村役場に勤めている父に聞いてみました。父は、原子力発電所には川内村からも多くの人が働いており、たくさんの雇用を生み出していたことで人々の暮らしを支えていたことなどを教えてくれました。父の話を聞いて、一方的に「原発が悪い」とは言い切れないということが分かりました。

自然豊かな福島県ですが、農産、畜産、水産などで風評被害に苦しめられてきたことも事実です。しかし、私はこの豊かな自然を有効活用することで、福島県を発展させることができると考えています。福島県には、メガソーラー発電、バイオマス発電、風力発電、地熱発電、水力発電など「再生可能エネルギー」を生み出す施設が県内各地にあります。私は本県で取り組んでいる「再生可能エネルギー先駆けの地」をより一層推進して世界に発信したいと考えています。これまでの基幹エネルギーの化石燃料や原子力に比べ、エネルギー変換効率が低いことや天候に左右されやすいなどの短所がありますが、県全体を見渡してバランス良くエネルギーを生み出したいと考えます。そのために実施事業者がある市町村の横のつながりを強化し、県がリーダーシップを発揮して県全体で再生可能エネルギーを安定供給できるようにしてほしいと思います。そうすることで県全体に常時安定したエネルギーを供給でき「再生可能エネルギー先駆けの地」として世界に発信し、成功モデルとなることができるのではないでしょうか。

私はこの機会にSDGsについて学びました。学習を進める中で、私自身が今できることに取り組まなければならないと思うようになりました。例えば「ゴミ拾い」です。これは目標11、15に関係すると思います。

私は、自分にできることは確実に行いたいと思っています。私の行動を友人や所属している野球チームに広め、一緒に取り組むことで輪が広がります。その輪をどんどん大きくし、一人一人が自覚して実行すれば、福島は復興を遂げ、「エネルギー先駆けの地」として「福島」から「世界」に発信していくことができると思います。

入　賞

きれいな福島へ

福島県立ふたば未来学園中学校・2年　齋藤（サイトウ） 佑磨（ユウマ）

10年前まで、私の家はキノコ農家だった。原木栽培でシイタケを育てていた。そう、10年前までは。でも、原木や山が汚染されてしまったせいでできなくなったそうだ。その頃、4歳だった僕は当時の状況を覚えていないが、父が夏ごろに、うどん屋のアルバイトをしていたことを覚えている。除染作業をした後、田んぼは再開できたが、原木を廃棄してしまったためシイタケ栽培を再び始める余裕は我が家にはなかった。もし、栽培を再開するとしたら、県外から木材を取り寄せないといけないため、原木代に輸送費までかかってしまうのだ。「できれば続けたかった。」と父は言っていた。それと、除染してもらったため、カブト虫が取れなくなったことも鮮明に覚えている。黒い袋の中で羽化して外に出ようとし、でも出きれずに袋に突き刺さっている、目が白くなったカブトムシのたくさんの死体とともに。「なぜこんなことになってしまったんだろう。」

当時の僕にはよく理解ができなかった。でも今ならわかる。去年1年間の中学校の授業で学んだからだ。それは原子力発電所の事故によるものだった。うっすらとはわかっていたが、メカニズムや当時の状況まで知ることができなかった。なんでこんな危ないものが福島にできたのか謎だったが、出稼ぎを減らして地元の人が労働する場所にするという側面もあったそうだ。

そんな中、福島は再生可能エネルギー先駆けの地となっている。それは、風評払拭や経済回復のためである。地理の授業のとき、太陽光発電や地熱発電のことで福島県が出てくると誇らしい気持ちになる。僕の家も、建て替えに合わせてソーラーパネルを設置した。また、近くに太陽光発電所ができて、再生可能エネルギーの普及を身近に感じている。僕はこのまま再生可能エネルギーが普及し、福島が日本一の再生可能エネルギー発電拠点になってほしいと思う。なぜかというと福島のイメージがクリーンなものになってほしいと考えているからだ。再生可能エネルギーで日本一になれば、原子力発電の負のイメージを払拭できるのではないだろうか。そのためには、発電する場所をどう増やすかが課題になるのではないかと思う。

よって僕は、田んぼソーラーシェアリングが広がっていったらいいなと考える。田んぼソーラーシェアリングとは、田んぼの上に細長い幾つものソーラーパネルを設置して発電をするという方法だ。それでは、稲に日が当たらないのではないかと思うかもしれないが、パネルの影は太陽の動きとともに動いていくから、ムラができるわけではないのだ。また、太陽のエネルギーは植物が本当に必要な量以上に降り注いでいるため、ソーラーパネルを設置して光が届かない影ができても、一定程度は問題ない。田んぼソーラーシェアリングが広がれば再生可能エネルギーが普及するだけではなく、農家の所得安定に繋がるのではないだろうか。

今後も僕は、「ふくしま」の再生のために、考え、みんなと共に学び歩んでいきたい。

入　賞

豊かに暮せる福島を目指して

川越市立東中学校・3年　中野（ナカノ）　晶藍（セイラ）

この一年、私達の生活は、コロナウィルスにより大きく変わってしまいました。あたり前に出来ていたことが出来なくなってしまった今、私はふと十年前の東日本大震災を思い出します。

震災の時、私はまだ幼稚園生でしたが、あの時のことは今でもはっきりと思い出せます。放射線のため、毎日遊んでいた公園に行けなくなり、楽しみにしていたどんぐり拾いやいも掘りも中止になってしまいました。子供心につらいこともありましたが、私達の地域は計画的な除染のおかげで比較的早く日常を取り戻すことができました。

五年後、私は仙台に引越すことになりました。仙台に行く途中、車で福島の帰還困難区域を通り、初めて被災地の現状を目の当たりにしました。壊れたまま残っている家屋や放射性物質の仮置場が並んでいる様子は原発事故からの復興の大変さを物語っていました。しかし、その景色から私が見たのは生でした。汚染されているといわれる大地は緑に覆われ、生命力で満ちあふれている様に見えました。

あの日からさらに五年が経ちました。現在でも福島では原子力災害の復興に向け、環境再生の取組が進められ、「原子力災害の福島」から「豊かに暮らせる福島」へ未来に向けてのチャレンジが進んでいるのです。

では、どのような町づくりをしたら良いのでしょうか。

私は、福島の魅力の一つである自然の豊かさを生かすために、再生可能エネルギーを上手に活用して、人にも自然にも優しい町づくりを提案します。例えば、新しく建物を建てる際、ソーラーパネルの設置を義務付けたり、帰還困難区域や放射性物質の処分場等にソーラーパネルや風車を設置し、大規模な発電施設を作ることで安定したエネルギーの供給を実現する。また、避難した住民の帰還だけではなく、コロナ自粛下の新しい働き方として定着した「テレワーク」で都市部からの移住を検討している人や老後をゆっくりと過したい人など、様々な人に住み易いと思ってもらうために、バリアフリーの徹底、防災も兼ねた公園の設置、学校、保育施設、医療施設、道路整備等のインフラ事業を行うだけでなく、さらに発展的な町づくりとして、自然を残す地域と居住地域に分けたり、高齢者と若者が助け合えるコミュニティができるようなシステムを行政が作ったら良いと思います。また、町の魅力を伝えるため、移住を検討している人がお試しで生活できるような施設や、温泉やキャンプ場のような娯楽施設も必要だと思います。たくさんの人が来れば、その魅力は、SNSなどによって拡散され、それを見て福島に来る人も増えると思います。

やはり、便利で住み易く、おしゃれな町には多くの人々が心をひかれると思います。そんな町を作るため、色々な人からアイデアを集め固定概念に囚われないすてきな町ができるといいなと思います。

入　賞

未来を生きる私たちと未来に向けてのSDGs

只見中学校・1年　新國（ニックニ） 夢萌（ユメ）

東日本大震災から十年がたちました。みなさんは、「東日本大震災」という言葉を聞くと、なにを思い浮かべますか？私が思い浮かべるものは「恐怖」というこの二文字です。当時私は三歳だったのでほとんど記憶はありませんが、大人の方の話を聞くとその時の大変さがわかりました。私たちが住む只見町は水害や地震は小さく、被害はあまりありませんでした。しかし、太平洋沿岸部に住んでた人たちは、とても苦しく悲しかったと思います。死者や行方不明者の数は何万人も、被害額は何十兆円もしたそうですね。この大きな震災でどれだけの人が悲しんだか、私には想像できません。被害にあった人たちは、自分の家にも帰ることができず、なれない環境の中で生活をして、精神的にも苦しかったと思います。その後も他県の人たちからはあまり良い目では見られず、ひどい扱いを受けてきたと思います。私はこれらの事から自然や環境がもたらす恐怖と人々がもたらす恐怖を知りました。

そこで、今私たちが学んでいるSDGsの目標、十七項目と結びつくと考えました。私が特に気になったのは十一番の「安全で災害に強く、持続可能な都市及び居住環境を実現しよう」という災害についての目標です。日本の防災は、自然災害の被害を減らすための備えと、被害から少しでも早く復興する力が世界で注目されています。この目標を達成することができたら、災害にあったとしても復興が早いから人々も安心できると思います。

震災の中でも特に被害が大きい「海」にも目標があります。それは十四番の「持続可能な開発のために海洋資源を保全し、持続可能な形で利用しよう」です。海は、津波や台風など大きな災害をもたらしてしまうこともありますが、私たちが口にする海産物を供給してくれて、豊かな生態系や海水温が気候の安定に大きな役割りを果たしてくれています。災害の時に海は人々を怖がらせているけど、私たち人間も海を怖がらせているのです。それは、近年、大量のごみや海洋汚染、サンゴ礁やマングローブ林の減少、地球温暖化など、人の力によって海を崩してしまっています。このままごみが増え続け、地球温暖化が進んでいったら、地球に住めなくなると聞きました。そのようなじたいを避けるために、今私たちができることから取り組んでいきたいです。

震災のことは忘れず、二つの目標を達成できるように日頃から意識して生活していきたいです。

入　賞　「時間の流れが教えてくれたこと」

福島県立ふたば未来学園中学校・2年　渡部（ワタナベ） 咲希（サキ）

災害に強いインフラを作り、持続可能な形で産業を発展させイノベーションを推進する。それがこれからの福島があるべき姿だと思う。

平成二十三年三月十一日十四時四十六分東日本大震災が発生した。私は当時四歳で震災時の記憶はほんの少ししか残っていないが、昨年の十一月に母が実家の大熊町から持って帰ってきた時計を見て、何かすごく心に響くものがあった。震災から九年経っても十四時四十六分を指したままの時計はまるで震災当時の被害の大きさや人々の大変さを物語っているようだった。

私が住んでいた大熊町は震災の年の四月二十二日に町内全域が警戒区域に設定された。それから一年後の十二月十日に警戒区域が解除され、避難準備解除区域、居住制限区域、帰還困難区域の三つのエリアに分かれた。それからまた八年後の平成三十一年四月十日に居住制限区域と避難指示解除準備区域だったところの避難指示が一部解除された。これは町民にとってはとても大きいことだった。そして昨年の三月五日には大野駅周辺の避難指示が解除され、帰還困難区域だった地域の一部立入規制が緩和された。あの日止まったままだった時計は震災の足跡を忘れないと同時にこれからの福島が進んでいくことを表しているのかも知れない。震災から十年経って、私たちの生活は新型ウイルスに侵され、たくさんの人が緊張感に包まれながら毎日を過ごしている。震災があった十年前は、こんなことになるなんて誰も想像しておらず、何気なく日々を過ごしていた。あの日もそうだったのだと思う。震災があった日も。それまで、そんなことになるなんて思っておらず、たった一つのことで福島が変わってしまった。そしてコロナ禍の今は日本が、世界がたった一つのウイルスのせいで肩身の狭い思いをしている。この十年で日本や世界ではたくさんのことが起きて、特にここ二年は世界が大きく変わった。町も同じようにここ十年で大きく発展してきている。

そんな中で私は災害に強いインフラがあり、持続可能な形で産業が発展しているイノベーションを推進した町になって欲しいと思う。これから先どんな災害が起こるか分からない日本や世界に、震災を経験した福島だからこそできることがあると思う。福島から日本へ、日本から世界へ、災害が起きたとしても自分の大切な人を守れるインフラを、福島が先駆けとなって作っていけたとしたら、東日本大震災があったことにもちゃんと意味があったんだと思える。SDGsから考えた視点は今後世界がよりよくなるための架け橋だと思う。だからこそ私は福島に変わってもらいたいし、変えたいと思う。自分の大切な人達が安心して暮らしていける災害に強いインフラがある場所。そんなところに福島がなっていってくれたらいいと私は思う。大好きで大切な故郷がこれからもずっと誰からも愛される場所であってほしい。

入　賞

「未来への一歩」

葛尾村立葛尾中学校・2年　渡辺（ワタナベ）　さくら（サクラ）

プラスチックゴミの海洋汚染は、どの程度なのだろうか。理科の環境授業のときに、私が持った疑問でした。

顕微鏡で煮干しの胃の内容物を観察すると、オキアミなどの微生物を見ることができました。成長段階によって変態するオキアミは、エビのようなものやミジンコのようなものがあり、その多様さが、面白くて夢中になって観察をしました。そのとき、5ミリメートルほどの白い紐状のものがあることに気づきました。先生に質問すると、「大発見だね。プラスチックの可能性があります。」と教えてくださいました。もし、紐状の物体がプラスチックなら熱を加えると溶けるだろうと考えました。

そこで早速、スライドガラスに紐状のものを取り出し、ガスバーナーで加熱しました。するとすぐに、丸まって溶けてしまったのです。なんと煮干しの胃袋からプラスチック片が見つかったのです。私は驚きを隠せませんでした。普段から食べているので、身体に害がないのか、カタクチイワシの成長に影響がないのかと心配になりました。

このことをきっかけに全校生5人で、「煮干し（カタクチイワシ）の胃の内容物から考える海洋汚染」をテーマに研究を進めることにしました。海洋の表層には、密度の低い状態でポリプロピレンやポリエチレン等がゴミとして漂っていると予想を立てました。胃の内容物が水に浮くかどうかでプラスチックの可能性のある物体と他の物体に分類しました。次に、浮いた物体を加熱して、溶けた場合は、プラスチックであると判断します。煮干し6袋、900グラムの胃の内容物を調べました。その結果、プラスチック片4個が見つかりました。白色、緑色、茶色など色は様々で、長さは、4から8ミリメートルの小さなものでした。これが、夏休みに煮干しの胃の内容物を観察した結果でした。

私たちが、使用したプラスチックの一部がやがて、海洋を漂い、カタクチイワシの体内に取り込まれていたと考えられます。ペットボトルが海底で分解されるまでに、約400年かかると言われています。この長い年月の間、食物連鎖を通して海洋生物の体内にプラスチックゴミが貯留し続けます。未来の海は、プラスチックゴミにより生態系が崩れ、死んだ海になってしまうかもしれないのです。

「煮干し（カタクチイワシ）の胃の内容物から考える海洋汚染」の研究を通して、海洋の生態系を守るためには、私たちの暮らしをプラスチック使用に頼らないものにし、プラスチックゴミを減らして海洋汚染の問題を早急に解決しなければならないと考えます。海は、世界中の国とつながっています。

「世界中の人と一緒に、未来の美しい海を守りたい。」

これが、私たち葛尾村立葛尾中学校全校生5人が発信する、未来への一歩です。そのために生活の中でプラスチックごみを減らし、環境にやさしい生活を送りたいです。震災から復興しようとする葛尾村だからこそできるリサイクルなどの提案も積極的に呼びかけていきたいです。

入　賞

ワーケーションの聖地としての福島・いわき市

福島県立磐城高校・1年　草野（クサノ） ひな美（ヒナミ）

1、はじめに

2021年はあの忌々しき東日本大震災から10年という節目の年である。当時幼稚園生だった私は、地震の経験が少なく、揺れを人一倍強く感じ、幼いながらも死を予感したほどであった。そして、その数分後、震災の更なる恐怖が襲ってきた。大津波である。大津波は人や家々を飲み込むだけでなく、今なお大問題となって続く福島第一原子力発電所までも襲った。その影響で、待ちに待った小学校入学後も校庭で友達と遊ぶことさえ許されず、小学生にとっての一大イベントである運動会は2年もの間開催されなかった。なぜなら除染が必要となり校庭の土の入れ替え作業を行っていた為である。それだけではなく外出時は必ず放射線量の計測計を首から下げ、常に随所に設置されたモニタリングポストの数値を気にかけて生活しなければならなかった。また、きれいな花を見つけて摘み取っても『危ないから今は摘んじゃダメ』と注意されるなど目に見えぬ敵である放射線によって生活に大きな制約を受けていた。だが、このような個人的な被害はまだまだ可愛いもので、放射線によって大打撃を受けたのは農業や漁業を営む方々だった。安全性が検査にて確保されたにも関わらず「福島で作られたから…」という理由で、現在も福島の農作物や海産物が首都圏などでは売れにくく安値で取引されているのである。

そんな震災によって甚大な被害を受けた福島であるが、私はこれからの未来、この福島だからこそできる事があると考えている。それはワーケーションの聖地として福島県、いわき市を売り出すことである。

2、これからの福島

前述したように、私は福島県、特にいわき市をワーケーションの聖地とするのが望ましいと思う。理由は主に3つである。

1つ目は、温暖な気候であること。暖流の影響で首都圏より夏涼しく冬暖かい為、冷暖房の使用量も少なく生活できる。また冬の降雪量がとても少ない為、路面凍結もあまり見られず冬でも安全に車の運転や散歩が可能である。また日照時間が長い為、ソーラーパネルを利用して自家発電を行っている家も少なくない。以上の理由から1年を通し、エコで大変過ごしやすい気候と言える。

2つ目は、多種多様な行楽施設があること。例えば県立水族館のアクアマリンふくしま、隣接し映画館も併設されている大型商業施設のイオンモール小名浜、温水プールや温泉・宿泊施設を備えたスパリゾートハワイアンズなどが挙げられる。それだけではない。広大な芝やアスレチックを備えた県立公園である三崎公園、多くのゴルフ場や温泉・スポーツジム、乗馬クラブや果実狩りといった自然と触れ合える施設も楽しめる。これだけの行楽施設が市内に存在する為、休日や仕事に疲れ一息つきたい時だけでなく、健康や憩いとしての朝活・夕活を気軽に楽しむことができる。このような利点からも有益と考えられる。

3つ目は、首都圏への交通の便は良いが、新型コロナウィルスの感染者がとても少ないこと。これはコロナ禍にある今だからこそ、ワーケーションの地として選ぶ際、重要な要因の1つとなるであろう。勿論、単に感染者が少ないだけならば他の地域もある。しかし、基本的に感染者が少ない地域の多くは首都圏からかなり離れた地域である。それに比べ、いわき市は首都圏から特急列車や高速道路利用で東京まで約2時間半、さらに高速バスは低料金で30分に1本、早朝から運行されている。会社への急な対応が必要な場合でも、降雪の影響を受けにくく首都圏に私有車で駆け付けられる距離である。これらの状況からも重宝される地域となり得ると考える。

3、おわりに

以上のことから、いわき市は太平洋に面し、多くの自然に囲まれ温暖な気候風土。農産物や海産物に恵まれ物価も安い。市内に多くのリラクゼーション施設を有し、更に最も懸念されている新型コロナウィルス感染者数が少なく首都圏からのアクセスも良好である。これほどまでにワーケーションに適した土地を生かさないで良いのだろうか。これらの理由から、これからの未来、いわき市をワーケーションの聖地とすることが福島の発展にもつながっていくのではないかと考える。

入　賞

放射線と福島

福島県立会津学鳳高等学校（総合学科）・1年　齋藤（サイトウ） 水月花（ミヅカ）

今にも落ちてきそうな大きなライトが頭の上で揺れている。体育館のあちこちから響く幼い子の泣き声。私の震災の日の記憶はそこから始まっている。数日後、テレビを見ると建物から煙が上がっている映像が流れていた。それが原子力発電所だとわかったのは小学生になってからだったと思う。震災から間もなく、私の生活の側にはいつも「放射線」があった。学校から「放射線が危険だからあまり校庭では遊ばないように」と言われたり、何も知らないまま甲状腺検査を受けたりしていた。毎日天気予報を見ては風向きを確認し、放射線が流れてくることを恐れていた。事故後は風評被害も激しく、福島産の食品の購入はためらわれ、福島県から避難した子どものいじめも問題になった。中学生になってから霧箱の実験をしたときも、私も友達も恐る恐る放射線の軌跡を見ていた。昔の私に「放射線に対するイメージは？」という質問をしたら、間違いなく「怖いもの、命の危険に関わるもの」と答えているだろう。

実際、原発事故により何人もの人々が被曝した。チェルノブイリ原発事故でも放射線による犠牲者がいた。私が過去に見た東海村JCO臨界事故の決死隊の二人の被曝後の写真は、私に放射線の恐怖を植え付け、放射線に良い印象はなかった。

しかし、原子力発電所は歴史を遡ると「核の平和利用」を目的に生まれたものだ。人を傷つけたりおびえさせたりするならば、それは兵器と何ら変わりないのではないか。確かに原発事故によって放射線の悪い面にますます多くの人が注目している。だが、一口に「放射線」と言っても悪いことばかりではない。

私は高校生になり、学校で行われた放射線セミナーに参加した。放射線とは何か。自然放射能や放射線のいろいろな利用方法について。放射線の影響を受けた細胞は新陳代謝で更新されること。現在の状況なら、原発事故による放射能について神経質になることはないなど、様々な放射線の良い面や正しい知識を得る中で、「放射線といえば原発」という私の思い込みは消えていった。

テレビを見ると、「原発事故から〇年」や「被災者の声」といった番組がしばしば放送されている。そこから、必ずみんな前を向いていることが伝わる。頑張ろうという気持ちが湧いてくる。福島での除染の様子、瓦礫の撤去作業などの取り組みを見ても、原発事故を乗り越えて未来を見ていることがわかった。

周囲の人々が希望を持って前に進もうとしているところを見て、私は少し後ろめたい気持ちになった。自分は原発の悪いところばかりを見て、悲しい過去のことしか考えていなかったからだ。犠牲になった方々やつらい思いをしている人のことを忘れてはいけないのは確かだが、それと同時に私達が未来の福島をどれだけ幸せにしていくかを考えることも大切だと思う。

県民が安心して普通の暮らしができる。他県からの偏見がなく、自信を持って福島の魅力を発信できる。そんな未来になってほしい。私自身、放射線や原発に不安や偏見があった身として、これからは放射線の良い面も見て周りに広めていきたい。

大人になったときに「私は福島で育ちました」と誇りを持って言えるような素敵な県になることを願っている。

入　賞

守り続ける福島、変わり続けるふくしま

福島県立福島東高等学校 普通科・2年　宍戸（シシド） 結実（ユウミ）

十年前の三月十一日、当時私は小学一年生でした。突然激しい揺れに襲われ、何もわからないまま校庭に避難し、頭が真っ白になりながら両親が迎えに来てくれるのを待っていました。黒い津波が街を跡形もなく飲み込み、原発がメルトダウンを起こしたというのに、妙に綺麗な雪が降っていたことを鮮明に覚えています。

時が経った今、昨年からコロナウィルスが流行っていますが私たちの県は県民の安全性と自由を一番に考えてくれています。自粛と言いつつも感染対策を入念に行ったうえで参加できるイベントを催したり、私たち高校生が街づくりを提案する「高校生フェスティバル」を応援してくださったりと、どんな状況にあっても諦めずに前を向こうと働きかけてくれました。

生活環境も街の様子も変わっていった福島県ですが、その中でも決して変わらないものが一つありました。

それは人と人との繋がりや温かい支援の輪です。

SDGsの項目に『住み続けられるまちづくり』とありますが、実際に行動に移すのはとても難しいと感じます。住み心地が良いと感じるには心の障壁をなくし差別や偏見をなくす必要があるため、いくら災害に強い街を作ったとしても人との繋がりが絶たれてしまえば未来も希望も生まれないと思うからです。今福島県は『シトラスリボン運動』を行っていますが、この運動をしようと思えるのは誹謗中傷や風評被害で受けた苦しみを痛いほど分かっているからだと思います。

差別や偏見は簡単になくなるものではありません。以前私は熊本で行われたサミットに参加し、未だに水俣病の風評被害に苦しむ声を聞きました。きっと福島もまだ風評被害は消えていないのだと思います。しかし、繋がりを大切にしてきたからこそ福島は復興に向かって歩み続けられたのだと私は信じています。

SNSやコロナの影響で人と人との話し合いの場が少なくなっている今、私たちはどのようにして人との繋がりを保っていくか、そして新たに輪を作り出していくかが課題になると思います。

そこで私が提案するのは住民参加型の議会を開き、市民、県民に寄り添った行政を展開することです。

今、私たちはコロナウィルスに対する不安や自粛による閉塞感で押しつぶされそうな日々を送っています。県や国から情報を与えられるとはいえ、悩みは人によって違います。誰かに相談したい、解決策を聞きたい、これからの県の方針を知りたい。気持ちは募るばかりですが、私たちでよい案、支援策が出るものではありません。そこで記者や役人だけでなく住民票を持っている人なら誰もが参加できる議会の場を設ければ、住民の不安も和らぎ、これからの生活を前向きに暮らせるきっかけにもなると思います。

直接会う場を設けなくても、テレワーク等の通信機器を生かせばどこでも参加できるようになりますし、これから5Gが発達すればよりスムーズな議論ができる自由な場になると思います。

私はこの町が好きです。そして、この町に住む温かい人の心に支えられ、励まされて育ってきました。しかし、大学に進学したら一度この町を離れなくてはならなくなるかもしれない。そう思うと、いつまでもこの絆が続いてほしいという思いが一層強くなります。高校生という立場では行動範囲が狭く、復興に関して出来ることも極々わずかなものばかりですが、未来の福島県に住む子供たちが「私の地元は福島県です！」と胸を張って言うことができるように考えて、行動していきたいです。

入　賞

復興への羅針盤

福島県立福島高等学校・2年　錫谷（スズタニ） 智（サトシ）

雄大な自然を前にして、色々なことを思うようになったのはあの日からだと思う。

――あの日、大きな地震があった日。激しい揺れに襲われ、自宅の机の下で必死に身を丸めた。耳を塞ぎ、歯を食いしばった。それでも地響きや棚の中身が崩れ落ちる音が鼓膜を強く震わせた。自分の身に起きていることが信じられなかった。震災の様子を報道するニュースを見ていても、しばらくの間は本当に不思議な気持ちだった。そのような報道を見ている自分が、自分でないような気がした。

震災の被害は長く長く尾を引いた。特に僕の住む福島では原発事故の影響で、外出さえも思い通りにはいかなかった。震災は僕から日常をことごとく奪っていった。しかし、日常などというのは初めからなかったのかもしれない。あったとしても非常にもろくて弱々しい、薄氷のようなものなのだろう。あの日、僕はそれを教わった。

震災から十年経って被災地の多くは元の姿を取り戻しつつある。福島市では震災前にはなかったビルも多く立ち、僕の高校の校舎も震災後に建て直したものだ。沿岸部でも更地が目立つものの、新しい建物がちらほらと見られる。しかし、これを見ても僕はあまり復興を感じない。見た目は復興したとしても、肝心なのはそこに住む人々やその生活が復興しているかどうかである。仕事は戻ったのか、町に活気はあるのか、人々は今の暮らしに満足しているか。景色だけ復興しても無意味であり、復興の本質は物質的、外面的なものではなくむしろ内面的なものだと思う。僕は復興を、人々が生きがいを持って現在の暮らしを謳歌できている状態と捉えている。

では内側から町を元気づけるにはどうすればよいのか。僕は産業の活性化を考えた。産業が活発になれば、そこに人が集い、快活なコミュニティーが形成される。これは復興の一つの形であり、一つのゴールだろう。その達成のために、その土地の強みを最大限に活用するのは重要なことだ。福島には風土や気候、文化などの観点において特徴的なところが数多く点在している。そしてその持ち味は全国で戦っても見劣りのしないものだと思う。県北を中心とした桃の栽培は全国屈指であるし、会津漆器は歴史的な価値を有する。ではどうすればそれらの地域産業を拡充できるのか。私は他の県や地方など外の地域へのアピールが有効だと考える。もちろん、この活動が宣伝としての効力を持つのは言うまでもない。産業や商品の認知度を上げ、風評被害の払拭にも役に立つだろう。それに加えて、私はピーアール活動にもう一つのメリットを見出した。それは小規模産業の問題の一つである地元の若者流出を防ぐことである。地元の人間を引き止めるために外部への活動をするのは矛盾するように思えるかもしれない。しかし、アピールという外向的な活動を行い、地元産業が評価されたならば、若者は自分の故郷の産業に新たな魅力を見つけることができる。長年その地域で育ち、産業を見つめてきたとしても気づけないものもある。それが外からの視線である。自分の地域の産業は全国に通用する高度なものであると分かれば地域の産業に誇りを持つようになるだろう。自分もその歴史を繋ぎたいと奮い立つ若者も少なくないはずである。これは若手獲得に直接的に結びつく。

このように、外向きの活動を進めることで全国に誇れる福島の諸産業の価値を高めると共に地元にもその価値を改めて周知させることができる。これは若手流出の防止に繋がり、地域産業の活発化に大きく貢献する。活発な産業、それに伴う明るいコミュニティーの形成は復興の一つの答えである。

人々が自信と誇りを持って笑顔で働き、暮らす福島、そんな福島をぜひ再びこの目で見てみたい。その日は遠くないと確信している。

――その日、福島が真の復興を成し遂げ、生まれ変わる日。

入　賞

スポーツで元気になる福島

昭和鉄道高校・3年　野沢（ノザワ） 凜成（リンセイ）

私は多くの人々が福島で体験をすることが必要であると考える。そのために、福島のスポーツと連携すべきである。

現在、県内では人口減少・高齢化が進んでいる。その対策として子育てしやすい環境、女性が働きやすい環境を整えている。その中でも今回は移住を受け入れる事業に焦点を置く。福島県では、移住の際の空き家改修費の一部補助をする制度がある。しかし、他の地域でも高齢化対策に移住の初期費用補助を行っており、差別化を図れているとは言い難い状況だ。数ある地域の中から福島を選ぶ可能性は低い。以前から福島という地域に関心を示していても、年に一度か二度訪れる程度であり、数百キロメートル離れた地に移住することはハードルが高い。そのために、福島に移住する体験ができる施設が必要である。移住に関心を持ち、福島に家を構えても違和感を感じてすぐに引っ越してしまったら、意味の無いことである。ミスマッチの無い移住のためにも、体験は必要である。しかし、移住するには複数日が必要とするため、参加者の職務に支障が発生しやむを得なく参加できないケースなどが多数考えられる。そのため、移住体験もできワーケーション施設としても利用できるようなものが理想である。しかし、どんなに素晴らしい施設が建っていても、利用者を作らなければ効果を発揮しない。私は集客という課題に対してスポーツを活用すべきだと考えている。現在、福島県に本拠地を置くプロスポーツチームは2つある。バスケットボールの福島ファイヤーボンズとサッカーの福島ユナイテッドFCである。どちらも各競技のトップリーグではないが、1部リーグ昇格に向けて毎試合熱く戦っている。これらのクラブが所属するリーグでは総当たり方式で順位をつけている。また、ホームアンドアウェイ方式で行っているため、対戦相手チームの選手や関係者、ファンなどは試合を目的に福島を訪れている。更に、ファン層はスポーツ観戦の前後にその土地の観光名所などに足を運び、飲食をする方が多い。上記のような方では、アウェイ試合に足を運ぶ度に観光をしているため、各地域ごとに比較をしている。より福島を印象的に思ってもらうには、おもてなしすることも大切だが、共に体験することが最も効果的である。試合の前後などに移住体験をしてもらい、より福島を印象的に思ってもらうことが第一歩である。ファンの一部の方は、仕事を休んで観戦に行く人も少なくはない。そのような人のためにもワーケーション機能もある施設は理想的である。

サッカーチームの福島ユナイテッドFCには農業部というものがある。選手やクラブスタッフが桃やお米など計6品目を生育している。移住体験の特典として選手とともに農業を体験できるような機会があれば主に2つの利点がある。1つは食育となることだ。現在、都心部では店舗に並んでいる状態の農作物しか見たことがなく、どのようにして実がなるかを知らない人が急増している。このような人々にも参加してもらい、手元に届くまでの経緯や食の大切さなどをスポーツを通じて感じて頂きたい。2つ目は安全性を示すことだ。福島県は2011年の原子力発電所の事故により、「福島の食べ物は危険」といったイメージが定着してしまっている。その中で、他地域から来訪した人が1日でも福島での農作業を体験することによって、自分の目と手で安全性を感じることができる。また、収穫ができなくても、自分の手の加えた農作物が成長し、店舗に並ぶ姿を見ることができたら親近感を感じるようになる。また、「福島県産」をより身近に感じて頂ける。そしてリピーターとなり、他県民でも福島県産でできた体で健康に生きていくことができる。

現在、福島のイメージを問われたら、震災や原子力発電所など負のイメージを持つ人が多いであろう。そのような人々は、福島県の良い点「福」に気づいていない。人々に希望を与えるスポーツを通じ、自分だけの福島の「福」を見つけてほしい。いずれ、福島でのスポーツ観戦の帰りには体験をすることが恒例となり、福島に移住するきっかけを持ってくれる人が1人でも増えるのが私の理想だ。

参考：テレビ東京 FOOT×BRAIN 2020年9月12日放送【サッカー×農業！Jクラブが挑む新たな可能性】

入　賞　福島県の「多様性」のもつ可能性

福島県立磐城高等学校・2年　渡邊（ワタナベ）　七香（ナナカ）

東日本大震災から10年が経過し、福島県は地震や津波、原発事故などで受けた痛手から立ち直ってきたといえる。しかし、原発事故による風評被害や、震災以降の著しい人口減少など、解決すべき課題は山積している。私は、これらの問題を解決するためのキーワードとして、「多様性」を挙げたい。

なぜ、「多様性」が重要だといえるのか。福島県内は、大きく3つの地域に分けることができる。会津、中通り、浜通りと呼ばれるそれぞれの地域では、奥羽山脈と阿武隈高地という山地に隔てられて、独自の文化圏が形成されている。この文化面での豊かさは、全国でも珍しく、福島特有のものであるといえるだろう。そして、私が思うに、この文化的多様性は、心の豊かさに直結するものだ。それぞれの文化圏、自治体で培ってきた祭りや年中行事、方言に至るまでの土着の文化は、同時に地域の人々の団結力にも表れている。私の住むいわき市でも部落とよばれる単位での親密な付き合いがある。こうした人の温かさを感じられる素朴なつながりこそ、都会にはない、地方だからこその魅力ではないだろうか。こうした魅力を守っていくことは、住みやすさに直結するため、これからの時代の人口減少を抑える一つの手立てになるのではないだろうか。

では、具体的に何をしていけばいいのだろうか。現在、県内ではイノベーションコースト構想というプロジェクトのもと、様々な先端産業関連の施設が建設されている。しかし、ふくしま医療機器開発支援センターの慢性的な赤字など、財政的問題もみられる。国からの手厚い復興支援がこれから先細っていくことを考えると、将来コストセンターになる可能性のある事業にこれ以上手を出さないことが肝要だろう。大きな事業で大きく変化しようとするのではなく、草の根の、小さな活動を温かく見守り、手厚く保護して大きな変化につなげることこそ、私がこれからの福島県の行政に求めることだ。そのうえで、自主財源のさらなる縮小を抑えるために、県内の産業、特に農業と観光業のさらなる発展も進めるべきだろう。まず農業分野は、アンテナショップ展開などによって、県外へのアピールも行っているにもかかわらず、根深い風評被害による価格低迷に悩んでいる。そこで、私は思い切ってアンテナショップを県内で展開することを提案したい。多様な文化圏が共存しているということは、裏を返すと、県内にも自分の地域の特産品を物珍しく思い、興味を持っている他地域の人がいるということなのである。わざわざ店舗を新設するのではなく、既存の道の駅、スーパーなどで各地域の特産品を並べるだけでも、購入する人は多いと思う。有機栽培野菜や魅力ある加工品の開発、販売によって付加価値を挙げることも併せて行うとより効果的だろう。

次に観光業だが、山も海も温泉も県内には沢山あり、会津や白河を中心とした歴史的観光地の宝庫でもある。残念ながら、今現在、新型コロナウイルスの影響によって観光業は大きな打撃を受けている。しばらくは県内でも人の往来を避ける必要があるため、すぐにというわけにはいかないが、1月上旬に中止された福島県観光周遊宿泊支援対策事業のような、県内のみをつなぐ観光促進事業をさらに拡充して実施し、県内での相互の行き来を実現させれば、観光地の生き残りの大きな力になるだろう。豊富で、多種多様な観光資源は、同じ県内の人間にとっても十分魅力的である。きっかけさえあれば大きな需要を生むのではないか。

以上から、私は福島県内の、多様な文化をもつところを利用して、県内の地域同士でそれぞれの魅力を見つけあい、互いに潤っていけるような独特のまちづくりを進めることが、福島県の生き残りの道であると思う。本当に豊かな社会は、異なるものが異なるままに共存できる場所にしかない。私は県内の「多様性」を守っていくことで、福島県をそんな場所にしていきたい。

特別賞

リモートを使って交流を	福島県立ふたば未来学園中学校・1年 五十嵐（イガラシ） 美菜（ミナ）
再生可能エネルギーと福島	福島県立ふたば未来学園中学校・2年 伊藤（イトウ） 珠弓（タマミ）
太陽光発電で新しい福島県へ	福島県立ふたば未来学園中学校・2年 大内（オオウチ） 萌楓（モカ）
福島は、再生可能エネルギーで・・・	福島県立ふたば未来学園中学校・1年 紺野（コンノ） 琉美子（ルミコ）
「新たな福島へ」	田村市立船引中学校・2年 箭内（ヤナイ） 楓（カエデ）
【より良い発電方法を目指して】	福島県立ふたば未来学園中学校・1年 中島（ナカジマ） 優空（ユア）
「再生可能エネルギーでクリーンなイメージにチェンジ！」	福島県立ふたば未来学園中学校・2年 吉田（ヨシダ） 遥（ハルカ）
Contact of FUKUSHIMA	青山学院高等部・2年（東京都） 滝本（タキモト） 智丹（チタン）
「福島の復興と未来の発展」	福島県立磐城高等学校・2年 横山（ヨコヤマ） 天（ソラ）

いっしょに考える「福島、その先の環境へ。」

チャレンジ・アワード

募集内容
応募様式

原子力災害を経験した福島のこれまでの10年の振り返りと、これからの福島が「こう変えたい」、「こうなって欲しい」という未来や希望に関する自分のアイデアや想いを応募ください。

テーマ　「福島、その先の環境へ。」

キーワード

新しいまち　SDGsを目指すまち　ワーケーションの聖地
ポスト・コロナ社会　再生可能エネルギー先駆けの地、ふくしま　地域循環共生圏※　など

※「地域循環共生圏」とは、各地域が美しい自然景観等の地域資源を最大限活用しながら自立・分散型の社会を形成しつつ、地域の特性に応じて資源を補完し支え合うことにより、地域の活力が最大限に発揮されることを目指す考え方です。

応募様式

中学生：作文（約1200字）　高校生以上の学生：論文（約1500字）

必須記載事項 ｜ タイトル・学校名（学科）・学年・氏名・フリガナ・連絡先（メール・電話番号）

※著作権は応募者本人に帰属しますが、環境省の広報等への使用についての許諾をいただきます。

応募資格

福島県にゆかりのある学生もしくは福島の復興に関心のある学生の方　※個人のみ

募集部門 ｜ ①中学生部門　②高校生部門　③高専生・専門学生・大学生部門

応募期間

令和2年11月27日（金）～令和3年1月29日（金）

主催：環境省　共催：福島県　福島県教育委員会

環境省 Ministry of the Environment　福島県

環境省　環境再生・資源循環局
特定廃棄物対策担当参事官室
福島再生・未来志向プロジェクトチーム
〒100-8975 東京都千代田区霞が関1-2-2　TEL：03-3581-2788　FAX：03-3581-3525

福島再生・未来志向プロジェクト
shiteihaiki.env.go.jp/fukushimamirai

環境省
Ministry of the Environment

福島県

令和3年3月12日